

田老の「油断」の背後で

In the Outback of the Broadcasted Negligence at Taro, Iwate, Japan

大辻永

Hisashi OTSUJI

茨城大学

Ibaraki University

概要：これまでの三陸地震津波で多数の犠牲者を出した岩手県宮古市田老町を、防災教育の観点から取り上げる。X字型の巨大防潮堤（田老万里の長城）によって津波を防御していた田老であったが、東北地方太平洋沖地震による津波で一部（第2防潮堤）が決壊した。これをもって当初「油断」があったと報じられていた。また、その影響を受けた区域の死亡率が他の区域に比べて高いことも報道された。ところが、決壊した第2防浪堤は、予算を組み合わせ、かさ上げされて建造されていたことが資料から垣間見られる。決壊の様子を見ても、中段までが残りそれより上部が消失している。一方、昭和9年からの街の復興では、道幅を広くし「隅切り」を設け、避難しやすいようにしていた。行政の防災訓練・設備もあり、小学校では「津波カルタ」が作られ、通学路のルートに至るまで工夫がなされていた。「防災力」が高かったからこそ、被害が小さく食い止められていたことを指摘する。

キーワード：防災教育、田老、津波カルタ、防潮堤、防災力

1. はじめに

かつての津波被害で壊滅的な被害を被り、「津波太郎」という「ありがたくない異名」（田老町2005）を受けた宮古市田老地区（表1）は、リアス式海岸沿いでは珍しく、複数の河川の河口が接近してできた平地に位置する（図1）。

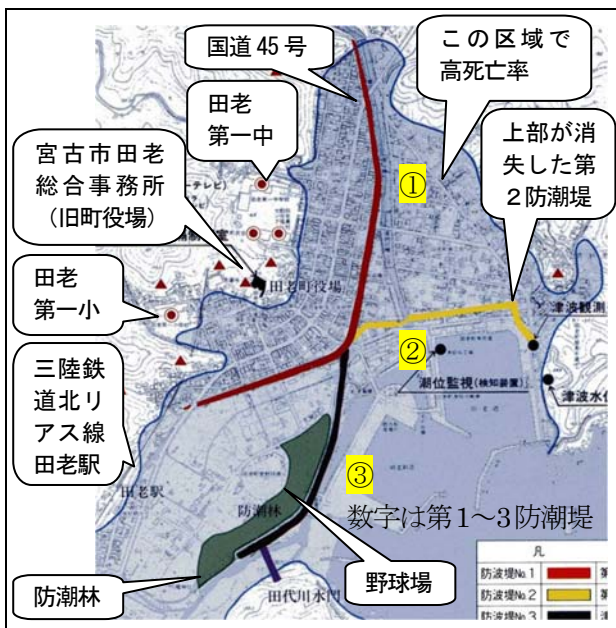


図1 宮古市田老地区

表1 田老地区の主な事項

事項・年代	説明
明治三陸地震津波 1896(M9).6.15	M7.5、最大波高 15m、死者行方不明者 1859 人、罹災生存者 36 人
昭和三陸地震津波 1933(S8).3.3	M8.5、最大波高 10m、死者行方不明者 911 人、罹災生存者 1828 人
第1防潮堤建設 S9から6年9ヶ月 S29-33年	戦争で中断 960mから 1350m 上幅3m、根幅最大 25m、高さ最大 7.7m（地上）海面より 10.65m（十勝沖地震 S27）
チリ地震津波 1960(S35).5.22-24	
第2防潮堤建設 S37-40 S41	高さ 5m、582m（チリ対策） 高さ 10m、582m（海岸保全）
鉄道開通 1972(S47)	宮古-田老間（国鉄宮古線）
第3防潮堤建設 S48-54	501m
東日本大震災 2011(H23).3.11	波高約 14m、死者 94、行方不明者 50

（田老町2005；毎日新聞2011から作成）

東日本大震災の発生直後、宮古市田老地区の被災状況も伝わってきた。200人程度という、過去の津波災害に比べれば相当少ない被災状況であるにもかかわらず、「200人にもものぼる」とされ、「防

潮堤に囲まれていたことによる油断があった」という地元の声が強調されて報じられた（産経ニュース 2011 など）。その背後にあったものを、震災前後の視察を踏まえ、防災教育の側面から報告する。

2. 人災的側面

表1から判るように、X字型の巨大防潮堤に二重に守られた街も、昭和初期までは無防備であった。結局X字型になったのも、人口増加が背後にあり、堤防の外に住宅が進出していった形跡として捉えられる。

何よりも、今回決壊した第2防潮堤の建設の経緯が注目される。別予算により、5mの高さまで造った後に10mまでかさ上げしている。被害状況（図2）を見ても、中段までは残り、そこで折れたように、それより上部が消失している。第2防潮堤は第1防潮堤よりも一段低く、幅も薄いものであった。

第2防潮堤の決壊により直接的被害を被った区域の死亡率は9.7%であった。それ以外の区域では、第1防潮堤に囲まれた部分で4.5%、第3防潮堤のみで守られた区域は6.1%であった（毎日新聞 2011）。

3. 大きかった「防災力」

昭和8年の昭和三陸大津波の後、街作りが始まった。避難時に大勢が殺到したことから道幅を広くし、スピードを落とさないで曲がれるように、曲がり角には「隅切り」が設けられた。行政としても、防災無線をはじめとする設備を整え、避難訓練も3月3日に行っていた。ただし、寒い時期の早朝に実施していたことから、参加者が年々少なくなっていたのも事実である。

民間でも、津波被害の悲惨さを訴え続ける活動があった。田端ヨシ氏（1925年生）による、手作りの紙芝居が代表例である。

人々の間に語り継がれる言葉として、「人の命はてんでんこ／めいめいこ」（大辻 2008; 矢守 2012）がある。作家の吉村昭氏は、「親しい人が声を掛けると泡を吹く」（吉村 1970）という慣習を紹介している。このように、教訓を伝えたり、気持ちを癒す手立てが、地元の人々の間には息づいていた。

小学校では「津波歌留多」が作られ、通学路の

ルートにも工夫がなされて、日頃からの防災意識は非常に高いものがあった。

4. おわりに

中型の漁船が乗り越えた巨大堤防を見ると、どの方向から波が来たのかがわかる。防潮堤に造られた門扉にしても、よせ波への対策はあったが「引き」を考慮して造られていなかった。防潮堤を今後造る場合は、より効果的な設計が求められる。

田老第一小学校の百周年記念誌を見ると、「にぎりめしを食いながら防潮林を植えた」という証言がある（田老第一小学校 1976）。次世代を担う子ども達を参加させることによって、物心共に「自分たちの」防潮堤として位置付くであろう。

5. 参考文献

- 毎日新聞 (2011.5.15) 高さ 10 メートルあつげなく/二重防潮堤にも限界, p.1,14,15.
大辻永. 2008. 「稲むらの火」のモデル濱口梧陵：人間愛と機転に満ちたハードとソフトの適応策, 三村信男・伊藤哲司他(編著)『サステイナビリティ学をつくる』新曜社, pp.173-182.
大辻永・遠藤輔. 2010. 津波災害教育モジュールの作成: 「稲むらの火」から「チリ地震」まで, 日本地学教育学会第 64 回全国大会 (鹿児島大会) (2010.8.21.), pp.40-41.
大辻永. 2011a. 田老地区における津波災害, 茨城大学東日本大震災調査団『東日本大震災調査報告書』 pp.91-94.
大辻永. 2011b. 生きてはたらく問題解決能力育成のために: 津波防災教育の教材研究, 藤岡達也(編著)『持続可能な社会をつくる防災教育』協同出版, pp.76-90.
産経ニュース (2011.3.17) 「防潮堤『油断あった』宮古市田老、岩手」
田老町. 2005. 『地域ガイドー津波と防災ー語り継ぐ体験』(第7刷)
田老町立第一小学校. 1976. 創立百年記念誌『百星霜』.
矢守克也. 2012. 「津波てんでんこ」の4つの意味, 『防災教育: 災害を乗り越えるために私達が子ども達に教えること』日本地球惑星科学連合 2012 年大会防災教育セッション, pp.51-62.
吉村昭. 1970, 2004. 『三陸海岸大津波』文春文庫.



図2 上部が消失した第2防潮堤